



清文集
前編
二

中村俊定文庫
文庫 18
263
2



洪く文集巻第二

目録

- 一 今更のしるし
- 二 日列君ふてしるし
- 三 秋月法列業小遊
- 四 南紀奥野氏へ返書
- 五 花江伽羅之妙
- 六 待書之品 拙書文集ノ格
- 七 砂胡貝の銘
- 八 巻之偈

文集二目録



Handwritten signature or mark in black ink.

Handwritten mark or signature in black ink on the right page.

九 新活二章

十 林夕君天賜を賀し奉る記

十一 猿飼氏の廣沢別荘小松ふ

十二 新活二章

十三 竹衣樹

十四 夏日下河原窟居

十五 夜光

十六 新波屋の松

十七 新活文ひろき

十八 与州高月氏杖を贈る

十九 羈中慈衣

二十 貝蓋の銘

二十一 洪水

二十二 青地拍を贈し人の名を

二十三 義士行



第一 首のしるし



費楊孟子
語ラ文曲ス

黒牛の黒馬 黒牡丹の黒かす。黒牡丹の黒は大黒の
黒なり。大黒れ黒箱白紙よのち形。あま。其白き

不在話下ハ
元ノ世ノ俗語
是ハ初ニト云

抱白箱の白牙あはは白舌乃おあはす。ひよの園
牙と走根梅々吟く病を治せん常に吟ふん。不在
話下。清水の噴紙雲をれ夕暮感神院社の名居哉
抱子。西牙東ふあ口のまろく夏腐哉。あふる音
たぐくあは。あはる。教の申ふ。あはき火急
牙あふきて急あふ人子施は。あは時琥珀の流を流
して樹の根す。崖の崩牙。短く暖は。あはは。

琥珀ノ流
あはるの牙

梅の下陰を以て紅血汗を人成願め唯礼を醉
 せく。雅淳の妻は路ふも照ふも或を悟のちと
 もたなりぬ。淮南の太子安室子ありて後口ふ
 ちなしてあり堂成拍へ。ぐー豆腐あ
 りともこの首たぐさううこなさん。角ト有て
 鏡ううとさけて流し。下中葉れ靈拍形
 んと尸とさへ

豆腐ハ安室
 淮南子

太蘭君とて佛領の首一桶を物ふり
 ちりうり

第二 日列君なりて

みはううもつかう御茶を物うまふ二か葉はと
 てとやうは有わらる。流流の形樹録おりく
 ち白ひて。一果序との物も。孤山れ陰のちう虎溪
 の水音。むららちる乃益ふさ美支枝を所ふ流流。
 之矣君の代の婆也りり一句尸もさうて

孤山ノ序
 林和靖

別子夏朽くら奥山こうくは矣

第三 秋月御列業之芳飯おけふ

む川ふひひひ奇

あめとねハむへもあうりさたうさめ
 み川さうりもふとあはけうちり

古今ノ序ヲ以
 テ疑ハレ
 名俗也

神をひのみむるれ山の草さうさう吹之れ秋ハ暮りたり

甘棠よよ甘棠よつとよ。昔予たつれおらとらうを。先是れ

詩云蔽芾

甘棠勿剪

勿敗召伯所

憩

満里。今能竊子科み軍子うふて。今有新能

ま。昔時めたるる是お拂ひ歩くをを指ふ。まど

騷客五六人

童子六七人

論語先進曰春服既成冠者五六人童子六七人

後大ら返

藤まう飯

清けたる。一枝二枝不ころむさるもほ

古今説書

奇三五系

ひひやす

秋風平

不ころむ

推乃へふはらそひ。来なうくゆる居きうとせうい

ゆるるは

いひよるたえてやんとすれとやむうと有さ飯の名よとをりれ

まかしく

藤氏

そも我照してれたのち志く。四兩を懸一旬我はむ

お葉の葉まはは。んさるやのけの京都のあけやの。枕涼き

のさるん

桐のよを

石桐斜點葉。桐葉坐題詩

上別と川のふあり

琴ハ

初層と共子。昨雨乃握の聲

飛切基詞

樽莊子

白花黒燕基ノ下韓子。有リ

基ハ

形を我切く樽や

朝燕

書ハ

螢火照文字。文字むさふ。庭の草能螢の如

梅邊秋屋二枝蜜々

一枝疎一樹亨々

一樹松月是毛鐘

画ハ

文集二

烟是糸巾
為予寫作
百梅園

其體

〇六

月宵——烟を糸巾梅の骨

まうとれまへハ事以下道輝又まうと。梅の
ことまうとまうとく海く記あり。まうと記を
まうと八時雨の雪まうと記あり。鳴神の里を
ひ。厚ハ記あり。杜の唇を記あり。雪枝子記
秋の姿ハまうとまうと記あり。月候を記あり。雪を
四時まのまうと記あり。つままの記あり。斜
陽まのまうと記あり。後記あり。月候を記あり。
本日記あり。本日記あり。本日記あり。本日記あり。
の枕のまうとハ

斜陽
謝冊
謂有

〇四 南紀奥野氏へ返書

魚の樂をえてまうとまうと。人來魚子解我授く
魚をまうとまうと。釣網の骨を海を離れ
て市に呼まうと。まうとまうと。價ハ活奥子百倍也。
事を好むの志。平魚我前記あり。まうとまうと
塩りてまうと。枚梅乃桶を形又山嶽我干て
まうとまうと。打是組まうと。伯叔も
を握りてまうと。まうとまうと。まうとまうと。
味をまうと。まうとまうと。石我清め。まうとまうと。
く又外の飯をまうと。魚我記あり。難と記あり。酸

平魚ハ
鯛也

伯叔ハ
伯夷叔齊

此外の飯
在子雜
篇ノ語

〇五

〇七

とらひ。甘きとつふ。若きとく子。別如人のまさり
とて。作本造りの。肩平似のよひ。なる。二
ら。能く。りて。ちや。して。夢。乃。夢。不。あ。り。た。る
を。化。身。友。目。を。愛。す。空。を。治。世。の。終。身。却。中。あ。世
下。あ。く。む。と。君。子。の。情。ま。さ。る。不。あ。り。ま。す。く。風。を
順。深。へ。書。月。う。み。山。平。画。き。空。の。月。日。も。墨
の。命。も。長。く。短。く。自。を。法。く。め。て。百。毫。不。満
た。し。や。る。人。の。心。れ。奥。の。流。ま。法。く。様。道。言。れ
解。の。松。風。一。束。蓋。の。塩。梅。硯。を。以。壓。と。ち。り。と。海
香。綿。庵。の。綿。む。く。一。粒。若。自。の。要。他。を。播。る。

定るれ風情すく小涼

何そもすはひう。珍らとの。此又。歌う。と。う。
や。こ。う。く。け。こ。話。才。控。の。那。の。解。辰。才
繪。を。打。つ。あ。て。後。之。を。物。笑。又。は。晒。周
て。下。と。と。し。

卯月

吉時之庵

流斜之翁

あし人の心の奥乃流流くとすいこと
あふをぬあふんあ流う

花江ゆれしゆまのうらりかたしとて不為ふ

才六 待夜の品 一 待夜文章ノ格

杜宇や一ちうともおとしねるるに実そのくき種
 種^{ワカ}うりー月うさくへてもいりて似もはく屋まや。
 あ、後世ゆきとて怒るんことを。あ、咲くも流る
 おくねとよまふ。孫ちうねいぬさんえ。あてた
 小飛とま小つへあもまむりうまきんはちう種ふ
 小ハうあまおの時めく式と。登る手指をあててこのキク
 さちて悲む^{フツクム}。常ねき方小琴うまあー一琴柱のこ
 ちも礼るゝこのねうとんまきひあうー一夜れ思ひす

いぬさ
あてき
小婢ノ名

うことああうて海の松風。んん誰れと又のねのとあ
 るのせし種一時。路とゆふもの志はなんうて今冬を
 思ひあきうちがたれ驚りのうーあうねとて成ううん
 まとあー夢醒るぬ人のうぬんうー種はあて。
 よれはのちちのまはあうううあせかりひとうはる
 よんねくこやハツをせ持ク。今こそと種まらまをそら
 ちらんくね良うらち種ハ強子睡まうまもんぬね
 ハみつううおうーく種く。三つの般ハ續けらおひねるよ。
 人きねを一夜と夜をうー。面を拭てまやあ人
 めつね青種ハまて種あうーまら小猿のうーら

一 大工

二 若白妻

三 能

四 芝居

五 傾城

六 歎

七 歎

八九 歎

十 死十生く病老老子憎銅其人

花あささゆやふすもやぬくへ

古き偈

元文四葉十月念二日一字換十則病魔降去

才九 雜活 比叡之菜食異波之茶

昔の日空——うらさるい空放の人の心ぬくちり二人連る

叡山へ去る者の路上の念言し者此方へ去る者六大師へ詣

又ゆりよ立ようへ——と云捨てりるる言とゆりよりのあへ一人

立る一人に記しにくきうり 拙とるり益も分れ月よ山坂を

かきりん先ハ月とのころこもい川——高銀言してま切あ

海の風をぬまらさく揃らるく叡山へ去り思思と必といひ

物米のそて坊さあへ約る思思子喜後淋しく何加とあ

とへらまきといひる思ハ茶本先——まんうく思思思思思思

回者不をあしひ一人の男ハ豆腐を厚く厚く長く

四角小おろした抽ききりちや、うりて焼きぬも焼きぬも

山打はま打入しまきくあしうく——く菜の切ら先——をむく

侍亭の所に入てはさし生木の枝を折て築りて
 いさく心まうせふまゝとて海やうなも知ぬ草くを引て
 脇打りけしめてきよあまうしては打ハ佛と打つや如
 竹のさそく徴たるてノ叡山なるを詠より連々を寄りて
 さだへま時をそそくなを守とてむてゆり
 とおしとんと云ちりてま去りあつ詠へ一人の男を寄
 りよとのの事の一みえたる月あつハ奇なるもよみ
 せたるうとてまはさなき身をそそくさのうとて懸入
 常く大はく掛るに彼木の時のた石の山もふよとてあは本
 草も目小くうとつたたる叡山まつとあつまらて出立

入り常ふむさくさくはどくくうー車牛の書きも昔
 めさるるまじりー新瑞のううう山はる伊勢りうのては
 耳あうまう像よを井のあうみ心をうーさ歌よま
 して福お爺言歌をよてこま先ーうう出ー湖のな
 風空とあつとつよなうて吹こもむの白いゆやんまを
 らくま人の心をうう如大作の御意と先そくゆりて
 桐叡山よ上り物也ーはちへま寄寄は何の詩まふけも
 あつはあうく委菜飯不が城のてんうくま草平の薮に
 なるうけりひくー抱りく志おもまう先もまらふハあて
 おは信ハ香盤のちうゆと御佛よは久アうふ

世を融まじりねむさなべおの不加減なる世なる此
ま集地をふいゆて群集さいらんさぬー漆子王城
の守護山と取り傳くふをうひかー有罪せん又こ
いとぬあうハ遠ううに堂山段うさうつくと云出
ちうと我兩人の風雅れ有とぬさとのをがひ先是
非之端あはれりあり何藝よなても上子下よれ心
的意前者くうくぬとー予例の老ひうこの出本
てぬさうーのむへさうさうも馬上うて坂を上り
うーとおもひまらして六田うういふも疲るるをう
てぬさうの引つけえおろーえ上ケて世々慈花王堂

ふに至り

とー然山世界のむを歌くさむ

中 眞実の風情世人を罵言して下りぬ
其後老女の方より一歩吐く傳う折やんくくふ
の風色をううりかして吾もよーの歌うぬれハ流傳乃
洞宗といふよの真意序あつてせれうも初て去年の
春海うりあうりとうりむハたりらあまとも柔屋もぬく
吟物もぬくぬく不自他あうとま良うて了ぬあう山人
叡山ふも料理柔屋あわうーとおもつるうー仍て左白ハ
中出さるぬりふき

うらん
訃也

仰らふとき。清く徳を秋津例の石乃津代長く
 傳へ侍正木のうらみのむきなきをわらふ。後部
 の民を撰天さう家派信を撰ひ。理を祿して
 志のそとを盡し。心我ゆに祿をのしたまひ
 くるよら。うらん日子をり如く。見れり利あり。
 武門の英氣凜くとして。と先と之原に埋まぬ玉
 柏奇蹟子侍う塚を成ス。沼ひふ志くうい志を
 らみあふ海州あり。夫くとして。多きまなく。清き香
 きき我をひ。と葉緑の帯を裂きて。おぬ
 を始す。千花萬草り。とを結て。又かへぬを

玉柏奇嶺
 石より生れ
 石菖也

とこちち
 もろくろく
 心く

こふれねよれたもひきくはくし。大己貴の法
 こころり叶ひ。玉の冠一帯して香案りうらん
 剗世中目能魔をかみし。僧部を延る我以常
 程中も愛し。終ふ。至まる哉時至まる哉。と
 の山陰り備へたまふ。志うく。おはし。と
 有わく。あう。と。たる。におわし。又。お
 あ。と。を。ひ。ひ。霧の。お。お。と。ひ。遊。瀧。の。池
 の。ほ。り。ふ。採。と。ま。り。を。ま。よ。黄。菊。あ。ま。き
 お。よ。き。日。う。あ。わ。る。哉。時。到。ま。る。の。か。と。の。婦
 を。わ。さ。せ。ふ。ふ。ま。は。く。如。時。り。應。して。思。ま

禁中の廊下
 を訪のお
 と。お。と。う

うーやうや秋の草木のあふりーん

月のうけくれ中々平志らるる

と長巻酒を好て秋をメ抱く。其時比時の比時を
らまかりて。秋和歌を作らんうーあさあありと

且

柳集三字
山文集元

柳集歌

と今日野小峰りりめて。一字能喜光の結風を草
免。故習て好し故有て文信。流したる雪の空を
く。嘆くむ静ふ。落る毛我んてつら。秋。吹きて共ふ

ハルカ
洋小豆のこま
寸馬五人

射地上第う。洋小豆能とく小松の安むひと

去んてんさ
くーい
信うふ

手く。善行旅人の傍。反照てくくと故陰成あつと
ん。岸能静しーの紅。火。影池水亦映まハ。わ。波流
る。を刻安て。喜音を短う。秋。ひせんさ。い。く。せ
ん。さ。の。や。よ。の。博。の。す。ん。さ。い。や

明のまを箱根のうみ能嵐山

塘のまく
塘生春州

塘のまくおのり志て。夜まゆく。年。園の松風顔

吟會より
あんで

まふまうへ。吟。會。密。及。二。我。ん。て。鐘。を。う。子。令。乃
音。園。折。ま。鳴。音。能。死。夜。さ。ら。く。清。く。白。屋。り。清。く。人。と。お。お。能

右各謝靈運
登池二様

涵虚亭中能床のうちまハ

さ。ゆ。る。あ。る。現。う。た。ん。体。と。り。て。秘。先。並。す

あそ屋をくハ武士ガ之を成りて其の
志似をする者もありやん兼ハ其ノ
とおアありしや和尚云く如く極小を成ふ
物も佛好志ハ由上よりありハた極
小くハ却て云いふも其作ありしや極ハ
極小くハ大乗ハ約極と云いハ畜生も
大切のや一いつまや其如くして法人感ハ
今く暫く畜生の心あり正ハ極小あり
是ハくハ其貴人も暫く其道く中釈
迦の教を熟讀して佛の心裡小可い

ふハ一極ハ其極の魂を似えしやハ其道の
まろくハ形より先其法甚及ありハ其程を
ハ其事くと云われれと極ハ其佛道を感
大古建立ありしやと云いハ其一釋サカシキ
我佛印極ハ東坡も

才十三 竹衣術

竹井ハ天ノ
字ト云
天乃字をくして地ハ極其竹衣井の形つ
く事となせらるも人乃世アリあり賢ぶおとむと
そじ。教ありしやハ其の意。法交ありむし
きあり。是をふまにいさ師ハ其子孫より

りも秋萩の露凝^るけしむ。るなく古され。あこ
 そ打め流る人あき視^る及よのほひかへ^る道と
 四時推^るか^るたハ衣^{カケ}架^{カケ}や。厚^るれ^るその博士乃^ハい^ハい^ハ
 く^ハ鉄^ハ城^ハと^ハ号^ケし^るそのお。一文^ハを^ハ我^ハ横^ハさ^るぬ^るあ
 たして^ハい^ハく^ハら^ハよ^ハむ^ハ居^ハさ^るあ^ハん^ハ準^ハ来^ハを^ハ曇^ハり^ても
 廿^ハ日^ハ。漆^ハ子^ハの^ハひ^ハほ^ハく^ハる^ハひ^ハ抽^ハし^るる^ハハ^ハ陰^ハ天^ハ
 と^ハ氣^ハの^ハ白^ハひ^ハを^ハと^ハむ^ハ。黄^ハか^ハ絲^ハ白^ハの^ハち^ハや^ハく^ハ無^ハ
 かわ^ハく^ハふ^ハ。妙^ハも^ハ乃^ハユ^ハと^ハれ^ハ眼^ハと^ハ刻^ハと^ハな^ハし^る傳^ハ
 玉^ハく^ハけ^ハ二^ハ足^ハハ^ハ浦^ハ際^ハ上^ハの^ハく^ハく^ハさ^ハく^ハ。松^ハと^ハ千^ハ
 草^ハも^ハ筋^ハ絵^ハふ^ハか^ハや^ハう^ハせ^ハ。一^ハ陽^ハ乃^ハ力^ハと^ハ光^ハも^ハ深^ハく

門^ハハ
 十六^ハ黒^ハ中

秋^ハ風^ハの^ハ吹^ハ
 小^ハく^ハく^ハ白^ハ
 第^ハ八^ハ下^ハ略

二^ハは^ハ一^ハら^ハぢ^ハく^ハ志^ハく^ハ。片^ハを^ハ木^ハ乃^ハ角^ハと^ハお^ハ布^ハ来^ハとの
 左^ハ右^ハふ^ハく^ハめ^ハき^ハ。香^ハ成^ハ妙^ハく^ハむ^ハお^ハ梅^ハ。好^ハな^ハを^ハ奪^ハふ^ハ白
 中^ハい^ハく^ハく^ハあ^ハく^ハよ^ハとい^ハへ^ハも。嬰^ハ栗^ハ乃^ハ香^ハと^ハあ^ハく^ハ紅
 お^ハん^ハぞ^ハの^ハあ^ハや^ハ一^ハき^ハら^ハけ^ハか^ハく^ハか^ハや^ハと^ハお^ハま^ハあり^ハお^ハ好
 り^ハあ^ハふ^ハ青^ハや^ハけ^ハく^ハと^ハあ^ハき^ハと^ハく^ハう^ハふ^ハ路^ハ。め^ハ。伯
 引^ハら^ハまれ^ハ乃^ハ宝^ハを^ハ鏡^ハり^ハか^ハく^ハや^ハ非^ハ乃^ハ。その^ハ好^ハと^ハ我^ハ信^ハ清^ハく。
 寺^ハが^ハあ^ハる^ハと^ハい^ハと^ハ奥^ハあ^ハる^ハ。釣^ハ衣^ハ櫛^ハ又^ハ風^ハ情^ハ清^ハく。
 我^ハの^ハ竹^ハ衣^ハ櫛^ハハ^ハ破^ハり^ハ香^ハ来^ハる^ハ右^ハ板^ハ二^ハ行^ハは^ハり^ハ。改^ハり
 き^ハる^ハ紙^ハあ^ハり^ハと^ハあ^ハ。嬰^ハふ^ハ櫃^ハも^ハか^ハく^ハく^ハと^ハく^ハく^ハを^ハ釘^ハ乃
 乃^ハと^ハお^ハの^ハ道^ハ候^ハあ^ハま^ハは^ハ。小^ハ衣^ハれ^ハ蠟^ハ乃^ハ稀^ハり^ハ紙^ハき^ハる^ハが

嬰^ハ栗^ハノ^ハ香^ハ
 小^ハ衣^ハレ^ハノ^ハ古^ハ事^ハ
 紙

しくみはうしお常ふぬ屋しあやしきうり穴
 ちん此君をまかしまちて四本針お後しが
 わち女乃あままとの使の布可下小見えし
 作りと母は衣柄かうり下しと。神くまの神の
 水ぬくみぬる人がしぬ。空しくおを常ふ富老冠
 小酔るぬ国の権し。衣乃林をほくまは。新田
 常子常後神とふ神る子真成薄命を久しく
 真成薄命 尋思して益まさりて後をうしく。あしゆ疑ひ
 久尋思とす
 見君王覚
 後疑
 乃洞度。従り横し操ぬ望せたり。まはめくち

くさ宿りかさ係。漢書此書ハきんこ

才十四 夏日下河原寓居

祝融
 禮記及
 山海經ニ説
 未安し
 南尔神あり。ひやの玉ふハ祝融といひ傳に火竜ふ
 してらまなくあけさ成配るとや。志業アの日より。か
 神のこころ世給やんう。日輪午ふあうんとて凝り
 午ふ苗まハ凝りてた我きう。流。志りえの山ふなる
 も乾きてまハ花とてとすり。ゆく牛席るまの毛
 ましく整りて。池ハ泡をまらたてあり。陽を度ハ波ま
 濁るを怒ふ。況や病侍人又ハ百里の旅を二日計
 ころん。あるハ世の家まき子ハいと切んなくお後を

陽彦ハ
 海底ノ神也
 山海經

と。まへてよのふはきつたをいふも心ひそめて

寛平三日

六月十六日

妹くつ終の

各名云名

抄

川風をみ働かなる妹うり中寄はちとちりしく

日ひの長たをよてあそび。くさむ人我歌ををれそい

ぬる橋をかまへて風をまひきりんや。我平堂よ氷れ

氷敷皮扇

天竺蓮車

れ

ぬれをけらした。皮のふあさき。おまふら寝て奪を

取人をもちくくくやむ屋をえ

引く。さね己を憎む。若さかともいひ。後。後。ふむ。あ

はさやつあやも耐う。まをすねう。く。は。時。あ。時

小西は雪つ起る。くちよ四方ハ文也。とちて雨落馬。斗

のき。た。て。又。申。す。一。写。神。の。遠。く。ひ。き。市。人

あ。う。ぬ。り。て。今。我。来。う。世。終。ふ。今。を。海。は。かり。よ。と。行。志

め。い。き。布。ひ。座。の。入。来。う。と。く。干。通。る。物。あ。と。さ。う。い。は。し

け。う。ひ。の。さ。は。取。も。さ。や。鄙。ひ。く。ま。と。中。く。都。の。所。の。あ

う。り。い。ら。免。し。く。涼。し。く。人。の。心。も。さ。ね。平。と。ち。て。時。あ

楓

旧事本記

曾波ノ木

延喜式

大舎人

寮二有

楓も先へさたを。かちくちく。と板屋ふき。て。楓そ

その本は。と。なく。や。川。舟。通。の。枝。の。下。陰。初。秋。の。山

は。秋。の。り。あ。る。ん。と。ふ。あ。く。あ。言。る。そ。の。一。物。く。て。い。の

は。ち。の。音。も。む。さ。し。く。雨。降。い。は。ち。ふ。れ。走。り。重。ハ。あ。や。し

古碑をはぐ。石椁を画き。雲ハ街ハ吹細く。ま
 いは照りまき。尚照りはく。鏡ハ草ハ自ラ家をむき。玉
 も折る。石もそ。毛詠人又あや。ま。ま。や。先。て。ま。ま。
 事。ま。ま。の。ま。ま。を。か。れ。に。世。の。ま。ま。は。あ。り。ま。ま。の。ま。ま。
 へ。ま。ま。の。ま。ま。を。か。れ。に。中。ふ。ま。ま。の。ま。ま。を。か。れ。に。
 風をまき。天下の撫を拂ひ。ち。ぬ。の。は。ま。ま。の。ま。ま。

太勢を令。一。む。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 字。ね。あ。は。一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 て。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

道を穿て夕平。活る風乃音

ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

才十五 寂然

れ。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
 一。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

悟青社
各門人

ふり乾の生さち。せ先取り。下成取り。おき
これあけ。憎りのあま。人さ。たのま。ん
能さ。あ。ぬ。より。そ。背。世。の。境。を。う。あ。ふ
され。當時。乃。人。を。古。人。の。非。を。あ。け。喫。茶
の。あ。れ。く。こ。も。の。と。か。せ。家。も。皆。我。程。く。の。あ
る。を。あ。く。た。古。人。れ。た。り。む。き。成。り。あ。へ。く
せ。た。地。を。う。ま。れ。時。を。え。う。く。た。自。恐。し。て。た
あ。れ。様。を。配。る。け。り。へ。一。行。雲。山。の。く。こ。む。み。り。と
く。ん。悟。青。社。府。あ。士。痛。む。取。の。も。不。く。と。く。行。ら
ひ。く。く。ひ。火。成。り。き。ま。を。あ。り。て。く。く

風ノ乳
茶ノ一各

奇袋
つ。つ。つ。つ。つ。つ
袋の奇袋
お。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ
お。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ

風を起す。風の乳。房。れ。車。た。を。煮。進。え。若。き。成
ぬ。み。破。洞。し。て。詩。を。解。し。奇。体。を。布。き。東。語
よ。遊。び。西。語。り。り。の。乳。我。の。家。お。ひ。く。ま。人
一。如。く。れ。と。や。ら。み。ゆ。り。一。た。これ。け。り。う。た。へ。あ
成。公。橋。の。有。り。人。と。郵。の。邦。お。君。を。識
宝。を。定。め。た。下。を。定。め。玉。を。あ。く。く。く。く。く。く。く
く。多。く。結。や。中。と。魂。乃。は。く。く。鏡。お。や。く。す。り。
考。り。は。く。く。み。お。小。懐。む。神。の。あ。の。程。く。
た。く。く。お。ん。り。一。お。ろ。ろ。一。あ。の。あ。り。一。乃
心。れ。り。む。け。ぬ。ん。あ。ら。も。け。奇。袋。見。鄙。老。の

三

三

口ふつらひん書かき感きしとらり是傳る。續きし
うらけ東台人をぢみしつまなく病の外ふ
ららふ。そは或や心をせしつらん。歎書を續て
和音を心故そは時をさねし人。秋乃
夜は月の光も寂しうららりとす^備たるも。
去ふ間笑風身出うし次して。表れ書ぢひら
ふぢねもふらしくしと二士をゆらう。うら
れ光の心もさえぬさるもの如し。續き書はどふん
かりは枕ぢぢりふさくまはあつくくおそひい
せはひこくもさるやとふみ傳りしとらり世に友

禅師指ハ
一指禅ナリ

我胸上ニ
うみ神作
まじノ心

不^キ己^キ若^キと云む志^キの教^キふをうらして。おとくし
さこのたれ先を極て時あつる日あらん珠を
んとの忠岑う心れり。ひくかゝ相懐みしと
ひ傳りも。矢を以射るうとくし。そは形なり。
いづく禅師の指を伝んや。古人若^キ其^キ矢を取
つて投下^キせん家^キ胸^キ上^キ小中^キ然^キん。驚りたり行し
心抱んや返し。心乃過ち悻らるしてあつる
とも光り形し玉れ然。はきりあふ突とをせはるは
縮^キる^キ形

第六 新波屋松

富士乃暖いとき我臨し。麓のよみ雪を
弱く成りて
 てしこの花の氣も三條の夕暮。芳根此正し
 とま万のりりる子代乃枝浪。下固却く世家
 のきあふけよのく多子入ん

寂て凌帝はあをみよしの又月を
 どのそやめ影をぬきは止まかくて。とみよ
 侍

廿七 報信 ぬこひはき

花有ちとい及る指布高者有それ以小形、旅通
 ふはのへーちよといへるあま。旅通とこのとき

夏濃は法かへ事。渠と束とる石とくき
 老おく糖よ海し。筆乃さぬ法と如くし
 家成と藤をとおひね。武門の影しく固から
 形ふは多く△りやま一人目如き整乃卷
 なくも心の何ゆわくね方とと積るをすく
 旅通便如くおとひ女合りまはをや兵かうはよ
 るこひ。洛外おれのしを信るる不章のねとこふ
 て。とに法を真しくかくま走しうりるね
 子又婦の口もくおひ乃法のをそ歌列せん
 自らあふこのお通ふすへるまは。な成るま

火うらもの
引つゝま
木のうらま
るいさつ
山伏のうら
をことんき

山伏や借りしとゆりきり
何事みややちや出せと
いふくかへーやと
くとおまき火うら
志ありきるふ
あえるふ風又吹志あり

此れま
司
志の
て
なり
宿巴

志乃をつか
まゆりし
拙くうろく
長くもく
らぬかと
自融ぬへーや
宿巴

た休せ
まもの
弁らる
句り

一
ま
ん

民
は朝
ま
ま
又

才三 貝蓋銘

み
あ
ま
ま
一
飲
三
百
杯
乃
を
ハ
ぬ
是
測
も
た
り
ま
ん

酒池糟田
討本記

玉の光を月のかりり母をれ鬼も鳥のさうも。心の
照らすより。こゝ世は波瀾地乃あやふのあすれ
ゆく息をぬくと次は所なくや却てまた
ふくさくく。久米乃さく山交り鬼をく。あ古
の愁を拂ぬ其玉を光れ貝のくかや。此は玉例
と作らる

才一 洪水

水成ゆき氷を捨冬成りくあを巢を捨ふさ
これの境を備一日成包こ月を偷み六月まで
了。神て騒るさう。下倍十月を存て神さく月と云

文の櫻

一節は中川の
長考

則神あり。水さく月のありさ。卒月ふさく。雨と
あつる日も水と成。あも皆人乃さくひ。然うと地
へ。樂しめらる。はく。むの掟たう。智者ハあめ
結のく海を泳ぐ。清き流よん。銭流ふ。流す
方又入まは丸う。は。象。思。よ。く。ま。は。角。あ。り。ま。い
て。系。は。流。ま。彼。を。さ。し。て。ハ。岩。を。い。さ。さ。森。を。踏。ひ
林を滅て。此。良。それ。幸。徳。の。鏡。と。な。り。て。ハ。漢。火。を
洒き釣糸をなくさ。あ。紫。糸。を。お。ね。た。鬼。の。怒。り。て
る。を。壓。せ。て。對。し。て。あ。ら。う。り。な。ら。ん。か。み。つ。あ
ら。あ。う。ひ。あ。ま。を。お。音。成。踏。ひ。く。中。中。川。の。屋

今夕何夕ハ
老杜カ行ノ語

とくもそを此ともさうりた。川あふを堤為て棟を
敷き。今夕へいそ此夕もそあふり行キ。河中
蛟を射るの跡帯布此茅屋棟子船あふ。早苗え
きその原より堀あふ。なあ付乃里く。里のあふ
くし里茂矢ひ証叫ひ去鼓吹し。園こく船を
いのちを換んて真をえく。整く松下に倚て笑
て一句あり

一寸之意
富天云呼子
敷人
雪川云故

雪よぬかれ跡を遺ふや夢ま素
あふそ垣も世能彼の立所とそ。斗を求てそを
めうとたや。有てそあのもははせて空一かくは。いあふ

せん一入海あうりいり見晴る新礼一。そは窓の灯子
そく

元文一先結と一六月上院

才正二 かく漬とよ相紙

神の物と人乃と

かく神の物と人乃と。いかな御名ろと世に禰く
論らるるあふ。あふく形は。或ハ糠よ漬る抽中
へ糠乃相と云。又ハ大根を以テ神子供よふり
神の物と云。神く也と云訓をかくと云へ。一。
皆そを及り。禁中其是。整下へ。女房の房と云り

おかしき哉まじくせよと呼時味をてしし傳る
日本と右今交也。みそは漬くるをわりのこれ
とら之香の字或下は事文字或用る此余情
あるはと居る後津のんたる及し其比あふ如ち
ありり白ひ来るる事なり事甚とも。然れ皆以雅
の要とて或取有んごさかす漬をるふあつて
糠は塩或加へて大根を漬て。家く民らこの細
文れ事とらありぬ。その中ふ難を出さるる事あり
也。稱しそかす漬と云。西域はあり漬をるこし
あり。此のちふかす我。世のさふかすやまごあり。

洞度の傍雲葉形葉と到て此情のこほやの
なりなり。此の日報月と云人よりかすれ物を
けし。意味いひかす。表は蘿蔔ハ筑紫海菜
押、使、使、却く好む。さおありのやあらんうさ
あ、ハ表登の来りらると母おぢねのき事し何
らしや日新そへく乾くこと此之乃強き成居

筑紫
押使
使使

第九三 義士行

竭、眩、之、力、効、忠、貞、之、節、
以、死、真、老、臣、心、
人の體をこの、ぬの姿え。大よろはしそとや

蜀相ハ
孔明ナリ

かゝるべきは如はん。そりかゝるは群士の忠
信。嗟蜀相を主歎くへ。噫昔如うとそとあり
ぬ。天則賢ふあふまは賢ふあふまは子も又名^{サツカ}禪
アそらん。皆足平生慎乃みちるおやそ
白ひと昔一たを結ひく。誓ひなり。みよし形
あつこれ川の川流。感とみし。の義物乃足たも
かよせもあつあつと月の影。其光の深き哉
まよふりし。も。貴族の心ふ其光と。まよふ
まよふまよふ。長く光のと。悔る哉

其依一
子西子萬章

其義一や。く。まのふさくら

蜀士の山さ
不二平橋を

元文五年

よみ。先耳遠し。先ハ不字と云人あり
鳥丸光彦
さおほふ。そりあす。蜀士のね平た。まをう。ま山さくら。哉
かくれ。の。平。なん

淡々文集卷之二終

